

## 開催にあたって

明治大学文学部では、毎年学外より兼任講師の先生を招聘し「エジプトの考古学」を開講しており、250人教室を用意せねばならない人気クラスである。同時に明治大学図書館では、ナポレオン1世エジプト侵攻(1798-1799)に参加したフランス人研究者達による『エジプト誌』*Description de l'Égypte* 初版(1809-1822)や、19世紀末・20世紀初頭イギリスのフランダース=ペトリー Flinders Petrie などが執筆した、ロンドンのエジプト探検財団 Egypt Exploration Fund の報告書など、エジプト学の歴史で画期となった調査研究報告をこれまで数多く収集してきた。

今年度は、ナポレオン『エジプト誌』と双璧を成す、19世紀エジプト学創成期における最高峰の研究書である、レプシウス LEPSIUS, Carl Richard (1810-1884)著『エジプト・エチオピア記念碑』*Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien* 初版を蔵書に加えることができた。『エジプト誌』は時々古書市場に出回るが、レプシウスはなかなかオークションにも出ないもので、さらにこの二書を両方所蔵している国内の図書館は、天理大学図書館のほかは知られていない。

このたび、レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』購入を期に、『エジプト誌』との比較展示を開催することとなった。『エジプト誌』も、その巨大なサイズゆえ、図書館でもあまり展示する機会がなかった。19世紀エジプト学者の遺跡観察への情熱を感じ取って頂ければ幸いである。なお、解説などの執筆は文学部佐々木憲一助教授があたり、雄松堂書店の協力を得たことを付記し、感謝の意を表したい。

2006年2月

明治大学図書館

---

■出品資料の展示替えを下記の予定で行います。

2/17(金)、3/8(水)

## レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』

レプシウス LEPSIUS, Carl Richard (1810-1884)著『エジプト・エチオピア記念碑』*Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien* 初版は、本篇(1849-1859)、趣意書 Prospectus (1849)、図版補遺 Supplementary Plates (1897-1900)、本文 Text (1897-1904)からなる。図版補遺と本文篇は、著者の死後、弟子のスイス人エジプト学者エトワール＝ナヴィーユ H. Edouard Naville により完成された。本書の本文篇は早くから本学図書館で所蔵していたが、図書館特別資料として本篇 12 巻の内、第 2 部、第 3 部を構成する 6 巻と、文学部研究用基礎資料として趣意書、図版補遺が今年度新たに図書館に収蔵された。これらは、本学図書館のエジプト学コレクションに資するところが極めて大きい。

本書は著者が 1842～1845 年の 4 年間にわたって実施した学術調査の成果報告である。彼を派遣した皇帝ヴィルヘルム 4 世に、「他のいかなる類似書よりもすぐれた形態と美をもつ」ことを要求されたこの報告の本篇は、フォリオ版大冊(765 × 610mm)12 冊で構成され、最大冊の第 5 巻は重量約 15 キロで、全体が図版 894 葉からなり、数多くの彩色版を含んでいる。その大きさだけでなく、紙の厚さ、三方金(天、地、小口を金にすること、full gilt edges; ちなみにナポレオンの報告書は天、地、小口とも白い紙のままである)の装飾など、単に「類似書」というより、明らかにナポレオンの報告書を強く意識している。つまりプロシア国家の威信をかけて製作された本といえる。本篇の構成は次の通りである。

第 1 部 (1、2 巻) トポグラフィーと建築(地図、絵図、設計図、見取図など)

第 2 部 (3、4 巻) 古王国の記念物

第 3 部 (5～8 巻) 新王国の記念物

第 4 部 (9 巻) ギリシア、ローマ時代の記念物

第 5 部 (10 巻) エチオピア記念物(第 25 王朝系のピラミッド・寺院の刻画文)

第 6 部 (11、12 巻) ヒエログリフを除く刻文集

このうち、本学図書館に今年度収蔵されたのは第 2、3 部の計 6 巻である。第 2 部(3、4 巻; 古王国時代の記念物)第 3 巻では、主として第 4、5 王朝に属する、ギゼー・サッカラなどのピラミッド壁面の浮彫が図示されている。第 4 巻では主として第 4、5、6、12、13 王朝に属する、ギゼー・サッカラ・メツツィン・ベニハッサン・テーベなどのピラミッド壁面の浮彫、巖石文などを集める。第 3 部(5～8 巻; 新王国の記念物)第 5、6 巻では、第 17～19 王朝系の、テーベ・エル＝カブ・カルナック・セムネン・アマルナなどの寺院、そのほかの壁面浮彫を、第 7、8 巻では、第 23、24、26、27、28 王朝を除く、第 19 王朝から第 30 王朝系のテーベなどの寺院を図示している。

これらは地域別、羅列的に編集されたナポレオン『エジプト誌』とは大きく異なり、全 12 巻をことごとくレリーフと見取図などに集中して、これらを時代順に配列したものである。レリーフなどは、石の色を忠実に写したため黄色系の色刷りが大半である。少数であるが極彩色の壁画などは、フルカラー図版である。とはいえ、『エジプト誌』とは異なり、陰をつけず、立体的な表現も採用されていない。 【請求記号 092.3/623//H】

### その他レプシウス関連出品資料

レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』趣意書 Prospectus (1849) 【099/3874//D】

レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』本文 Text (1897-1904) 【099/3874//D】

レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』図版補遺 Supplementary Plates (1897-1900) 【099/3874//D】

レプシウス『エジプト・エチオピア旅行記』(1852) 【240/66//A】

## レプシウス LEPSIUS, Carl Richard (1810-1884)

著者レプシウス LEPSIUS, Carl Richard (1810-1884)はエジプト学創始者の一人で、ベルリン大学教授、ベルリンのエジプト博物館長、ベルリン図書館長を務めた。1810年ドイツ Naumburg に生まれ、ライプチヒ、ゲッティンゲン、ベルリンの各大学で、比較言語学などを修め、1833年に古典考古学で博士号を授与された。その後パリへ赴き、研究を深めた。ちょうど、ジャン＝フランソワ＝シャンポリオン Jean-François Champollion (1790-1832)がエジプトの絵文字解読に成功し、その成果を刊行したところであった。レプシウスはシャンポリオンの研究成果を積極的に支持し、自らは絵文字の音節記号やコプト語との類似性を認識し、学界での古エジプト語の理解をさらに深めることに大きく貢献した。さらにヨーロッパ各地で収集されていたエジプトの考古・美術資料を実際に調べて回った。

その頃ドイツの探検家フンボルト Alexander von Humbolt はプロシア国王フリードリヒ＝ヴィルヘルム4世に、ナポレオン1世の調査の欠を補うためのエジプト遠征を提言、1841年、弱冠31歳のレプシウスがその遠征の総指揮を命じられる。レプシウスは32歳でベルリン大学講師に就任、翌1842年、多数の研究者と優秀な画家を伴いエジプトに出発する。当初から1845年までの4年計画であったため、それ以前のエジプト遠征では考えられないほど綿密な学術調査を、ナイル渓谷からスーダンを対象に行っている。その際メンフィスだけで6ヶ月、テーベに7ヶ月を費やした。

レプシウス遠征の最大の成果は、初期王朝時代・古王国時代(第1～8王朝、3100～2270 B.C.頃)の巨大建造物を多数発見したことである。紀元前4千年紀まで遡って遺跡を徹底調査した功績は計り知れない。なかでも、30基のピラミッドを新たに発見し、マスタバ130基の調査は特筆される。マスタバとは、初期王朝時代に王や貴族の墓として、古王国時代には貴族墓としてのみ建造された建物である。石棺を納める地下の玄室と貯蔵庫の上に、煉瓦や石を積み上げた建物が載る構造をとる。地上の建物内部には偽扉と祭壇を備えた礼拝室があり、壁面には日常生活の様子などが描かれた。

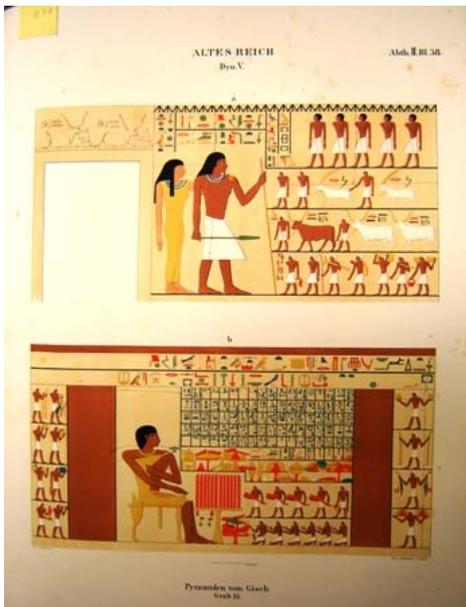
レプシウスは王家の谷で計測を行った最初の研究者であり、寺院の壁面の文字やレリーフの型取りを行った。またカルトウーシュ cartouche という絵文字の文章中、王名が記されている部分も徹底的に記録した。最終的に、完全な墓室・巨大な彫像・大型の浮彫・パピルス・レリーフの型取り・立面図・平面図・地図など、計15,000点以上をプロシアに持ち帰ることを当時のエジプト総督ムハンマド＝アリーから許された。『神、墓、学者』のなかで著者ツェラムは、レプシウスについて、彼がエジプトで見たものに秩序を見出し、エジプト史をパノラマとして捉えることができた最初の学者と評価している。

この遠征のおかげで、1850年設立の王立博物館エジプト部門はエジプト学をリードする研究機関に成長した。1855年、建築家アウグスト＝シュテラーの設計により新博物館が国立ベルリン博物館群の立地する博物館島に開設された。これらの収集品を展示するため、シュテラーはレプシウスの構想に従い、新博物館内に豪華な内装を施した展示室をデザインしている。

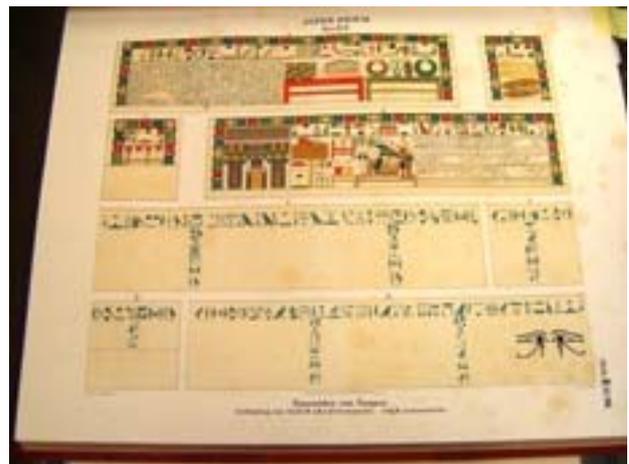
1865年、レプシウスはエジプト博物館長に就任。翌年またエジプトを訪れ、ナイル河口地域三角州の東部とスエズ地帯の巨大建造物を調査した。このとき、第21王朝(1069-945 B.C.頃)時代の首都であるタニス Tanis を発見した。この調査では、「カノープス Canopus の定め」と後に呼ばれる、古エジプト語、ギリシャ語を含む3ヶ国語の碑文を発見、ロゼッタ・ストーンに基づくシャンポリオンの解読が正しいことが立証されることとなった。

レプシウスは同時にベルリン大学の教壇に立ち、多くの後進を育てた。19世紀末から

20世紀初頭に、ロンドンの Egypt Exploration Fund で活躍したスイス人エジプト学者、エトワール＝ナヴィーユ H. Edouard Naville はその一人である。



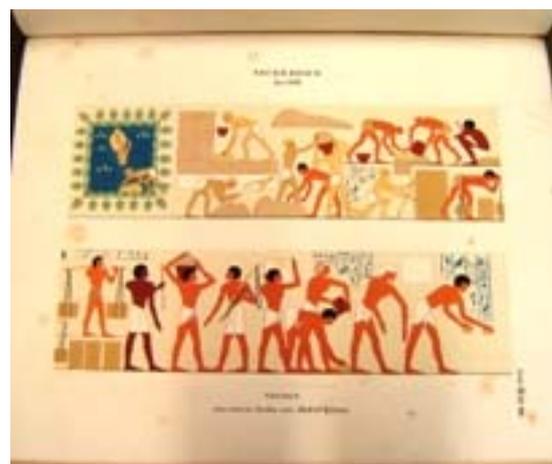
レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』  
本篇第 III 卷 古王国第 5 王朝  
ギザのピラミッド、15号墓



レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』  
本篇第 IV 卷 古王国第 4 王朝  
サッカラのピラミッド、10号墓



レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』  
本篇第 V 卷 新王国  
テーベ、カルナックのオベリスク



レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』  
本篇第 V 卷 新王国第 18 王朝 アブド・アル  
＝クルナの墓地の壁画

『エジプト誌：フランス軍の遠征中にエジプトで行った観察と研究の集成』  
初版(1809～22)

*Description de l'Égypte, ou, Recueil des observations et des recherches qui ont été  
faites en Égypte pendant l'expédition de l'armée française*

1798年のエジプト侵攻にあたって、ナポレオンはフランス学士院の協力を得、約200人の学者、技術者、画家、製図家らを引率していた。そして戦争遂行と同時にナイル川中・下流域の巨大遺跡は勿論、動植物、民俗の調査を実施した。そこでは、後に絵文字解読の鍵となるロゼッタ・ストーンを含む多くの資料を収集したが、帰途、ネルソン提督率いるイギリス海軍に大敗、収集品はすべてイギリスへ引き渡される。フランスが発見したロゼッタ・ストーンが大英博物館で展示されている所以である。しかし、調査の際作成していた膨大な資料をもとに、当時のフランス最高の学問水準と技術の粋を尽くして完成した、ナポレオン勅命の書がこの大部な報告書である。

本報告書は、古代篇 Antiquités、現代篇 État Moderne、自然史(博物)篇 Histoire Naturelleの3部門構成で、各部門が複数冊の本文と図版から成る。本学が所蔵する初版はパリの帝室印刷所で印刷され、1814年のナポレオン失脚後も、ルイ18世の王党政府により事業が継続された。したがって、本の扉の「ナポレオン皇帝の命により帝室印刷所で印刷」のフレーズが、「政府により王室印刷所で印刷」に1814年以降替わっている。そして1822年にやっと完成した。

本学所蔵の報告書の構成と出版年は次の通りである。

本文：9冊 フォリオ判(25.4 × 40.7cm)

古代篇 解説(Descriptions) I (1809)、II (1818)

古代篇 覚書(Memoires) I (1809)、II (1818)

現代篇 I (1809)、II/1 (1812)、II/2(1822)

博物篇 I (1809)、II (1812)

図版：11冊 グランド・アトラス判(53.4 × 70.2 cm)

古代篇 I (1809)、II (1812)、III (1812)、IV (1817)、V (1822)：エレファント判に含まれるものを入れて419図

現代篇 I (1809)、II (1817)：エレファント判に含まれるものを入れて170図

博物篇 I (1809)、II/1 (1817)、II/2 (1818?)：224図

序文篇(1822?)

3冊 エレファント判(70.2 × 106.8cm)

古代篇 VI 古代篇 IV、V および現代篇 II の大型図版を含む

古代篇 VII 古代篇 I、II、III および現代篇 I、古代篇本文覚書に付加されるべき大型図版を含む

地図篇(1818?) エジプト地形図47、エジプト地図3、その他本文に付加されるべき地形図を含め、合計52図

これら図版の大半は単色の銅板印刷であるが、今回の展示の目玉でもある手彩色のカラー図版44面が含まれる。

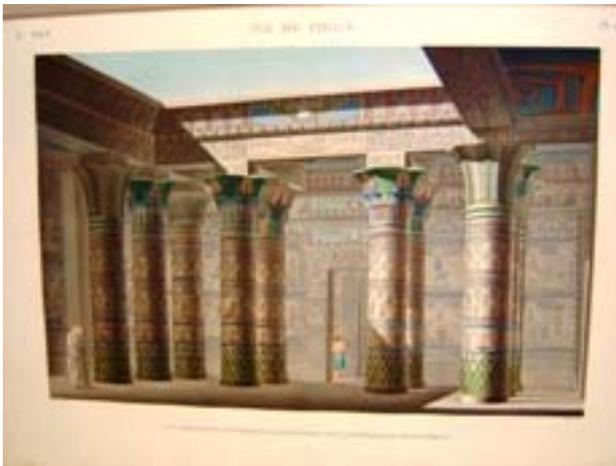
天理大学富永牧太氏の調査に拠れば、初版本には製本の経緯によりセットの冊数が異なるものが知られている。天理大学は初版本のうち、本学コレクションと同様のエレファント判を伴うセットとそうでないセットを2種類所蔵している。大英博物館の蔵書もエレファント判を伴わないセットである。これは、基本的なセットとして図版12冊があつて、

その中から超大型図版のみを抜き出しエレファント版 2 冊にまとめたものらしい。また地図篇も、本学蔵のようにエレファント判のものと、グランド・アトラス判のものがあるらしい。その刊行年も、1828 年説がある。

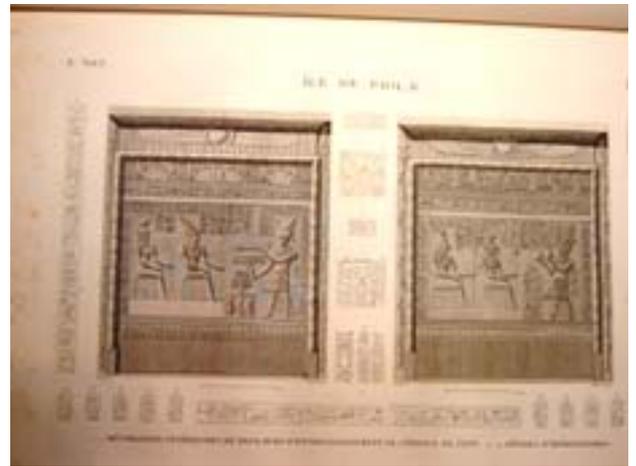
なおこの『エジプト誌』は、第 2 版が 1821 年から 30 年にかけて刊行される。第 2 版には「ナポレオン皇帝の命により云々」の記述が扉になく、出版はパンクック印刷所であること、彩色図版がないこと、などの差異がある。第 2 版については本学では所蔵していない。  
【請求記号 092.3/241//H】

**その他『エジプト誌』関連出品資料**

ドノン『上下エジプトへの旅』 (1802) 【092.3/400//H】



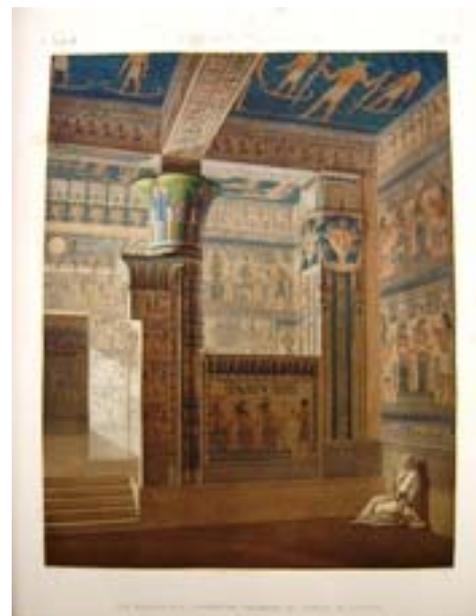
ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第I巻  
フィラエの神殿



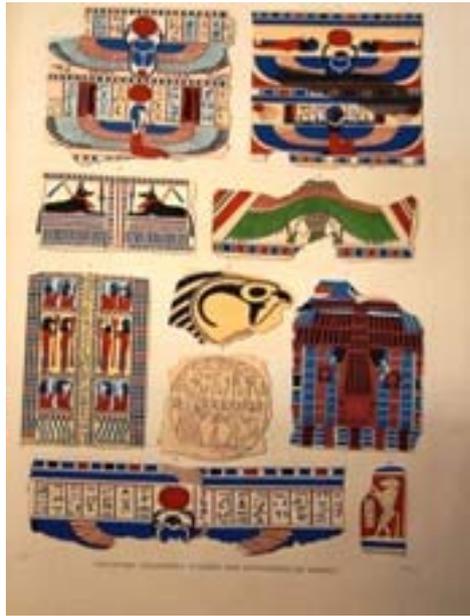
ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第I巻  
フィラエの神殿 トロヤヌスの納涼台円柱の間にある壁の内部装飾



ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第I巻  
フィラエの西神殿及び諸記念物の遠景



ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第II巻  
テーベ東岸の寺院



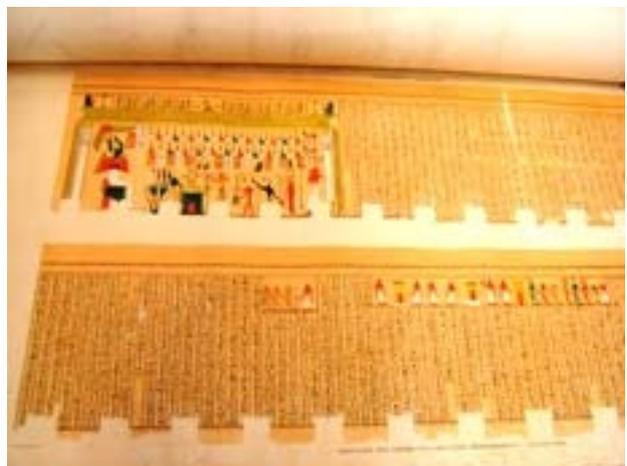
ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第II巻  
ミイラの包装の絵



ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第II巻  
王家の谷、ラムセス3世の墳墓の絵画



ナポレオン『エジプト誌』古代篇 図版 第II巻  
王家の谷の墳墓の絵画



ナポレオン『エジプト誌』古代篇  
図版(エレファント判) テーベ発見の文書

### 明治大学図書館所蔵エジプト学関係貴重書展

編集：明治大学中央図書館ギャラリー企画運営 WG

発行：明治大学図書館

発行日：2006年2月1日